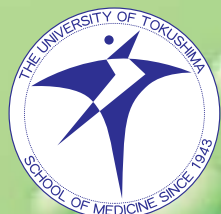


徳島大学



The University of Tokushima  
School of Medicine

# 医学部だより

第2号

2003.4.30

## 巻頭言

### 個性輝く医学部の創生と活性化に向けた改革

医学部長 曾根三郎



平成15年度の新学期がスタートした。本学医学部の歴史の中にさらに輝かしいページを加えて行くには平成16年度から導入される法人化に向けての対応と全職員、学生の連帯のもとに積極的に改革に取り組むべきであり、多くの課題があげられる。

1年間の準備期間として、医学部改革は重要なステップとなる。この4月から改革し取り組んでいる課題として、学部長補佐制度の導入、無駄のない効率的な運営が可能な委員会の再編、研究支援体制の強化を図るための先端医療研究資源・技術支援センターの設置、全人的に取り組める医療人育成のための医療教育統合支援センターの設立、医学科研究棟改修計画があげられる。

本学医学部は医学科、栄養学科、保健学科の3学科からなり、栄養学科の併設は日本でも唯一であり、生命科学から医学、医療の教育、研究の拠点としてそれぞれの役割を担っている。教育、研究にとどまらず組織運営についても積極的に企画、立案から実施に向けてそれぞれの活動を強化していくために、学部長補佐の制度を導入し、久保教授、玉置教授、永広教授の3人の方々にお願いした。また、各委員会を3分野（教育、研究、組織運営）に再編し、全教官による効率的でかつ建設的な運営を行うべく各教授は2年間同じ分

野だけを委員として役割を果たして頂くこととした。その結果、同じような委員会を統廃合し無駄な時間を節約出来るものと考えている。各補佐は関連委員会と連携を密にしながら、教育・研究の改善に向けてご尽力をお願いしている。研究支援体制の強化は医学部の使命である生命科学研究を進展させる上で大きな成果を生む原動力となる。そこで、医学部各講座から拠出している技官と研究スペースからなる総合研究室と医学部附属動物実験施設を統合し、先端医療研究技術支援と研究資源の保管と管理運営を行うためのセンターを設立し、佐々木教授にセンター長をお願いした。旧総研のメンバーは全員が同じ部屋にて待機し、大学院生、教官からの技術支援の要望に応える体制を取っており、ホームページ、広報活動に力を入れて頂いている。また、医学教育支援室は医学科の学生教育に重点を置き、チュートリアル教育、クリニカルクラークシップなどの導入を図り、素晴らしい医師育成に向けた教育改善を進めて来た。しかし、医療を担うという観点から管理栄養士、保健学科での看護師、検査技師、放射線技師などの教育も重要な課題となっている。そこで、医学教育支援室を発展的に医療教育統合支援センターと改組することにより医療に共通の知識や情報、さらに技能についても習得できるように総合的にカリキュラム編成を行い、医療全般に通じる幅広い学識を持った医療人育成に向けた教育カリキュラムや実習などの企画、立案などに取り組んで頂くための組織と位

置づけている。医療教育の一環として、解剖教育支援室も発足し、第二解剖からのご好意により部屋を提供頂き、泉教授（室長）のもとに3人のスタッフが協力して、系統解剖、病理解剖、法医解剖の支援をしている。

本学は研究大学としての役割を果たすことが求められている。本学部の大学院プロテオミクス医科学研究の発展と推進を柱に、医学部主催の徳島プロテオミクス医学シンポジウムの開催（平成15年12月4日予定）し、最新情報の交換の場を提供する、3分野以上の若手研究者からなる研究プロジェクトを公募し、助成する制度の導入、外国人留学に対する学術奨励賞の設置、教官全員による科学研究費申請の義務化を進める予定である。最先端医科学研究による成果

（シーズ）を企業との共同研究により目に見える社会貢献へと創生していくためにトランスレーショナルリサーチを促進する産学連携医学研究推進機構を設置する予定である。

最後に、アカデミアとしての教育・研究の環境基盤の整備は重要な課題であり、予定されている医学科研究棟の改修を機に、教官、学生が最先端生命科学ならびに医学、医療に夢と誇りを持って取り組むことが出来る快適な施設およびキャンパス環境の整備を進めていきたい。個性輝く医学部を創生していくためにも、今後とも関係各位のご支援並びにご協力の程お願い致します。

## 医歯薬学統合大学院設立に向けた取り組みについて

医歯薬学統合大学院推進協議会

曾根三郎（医学部長）

平成10年に「21世紀の大学像と今後の改革方策について 競争的環境の中で個性が輝く大学」という答申が大学審議会より出され、平成16年度からの国立大学法人化を迎える中で、各国立大学の生き残りをかけた改革と熾烈な競争時代が到来している。徳島大学は2つのキャンパスからなり、それぞれの個性、すなわち蔵本地区は生命科学を中心とした医療創出であり、常三島地区は技術工学系と総合科学系がある。昨年の秋より蔵本キャンパスを中心とした生命科学系の統合大学院構想が持ち上がり、医学研究科、栄養学研究科、歯学研究科、薬学研究科の4つの研究科を融合した、ヘルスバイオサイエンス研究部、教育部からなる統合大学院構想へと発展してきている。当医学部は平成14年度より独立専攻系として大学院プロテオミクス医科学専攻がスタートし、大学院大学としての足場を築きつつあるが、さらに発展的に改組再編されることとなる。

21世紀は「生命の世紀」と言われるように、生命への理解が深まることによって、医学、医療の飛躍的な発展や食料・環境問題の解決に寄与することが期待されている。蔵本キャンパスに、医療教育研究を統合し、

基礎生命科学を基盤に新しい医療の創出と社会の要請に応える人材の育成を目指す拠点として医歯薬栄養学が融合する。ヘルスバイオサイエンスをキーワードとした一つの大学院へと統合再編する構想は社会的な要請でもあり、国家的な課題に応える見地からも非常に重要なステップとなる。

現在までに医歯薬学の各学部長（曾根、三宅、際田）と栄養学研究科長（寺尾）が中心となって統合大学院推進協議会を設置し、本部事務局とも連携して文部科学省医学教育課へ赴き、昨年11月よりヒアリングを何度も受けている。現在、統合大学院の本学将来構想における位置づけ、理念、方向、枠組み、学部から専門教育までの一貫性と学部の枠を超えた教育研究システム、管理運営などの提案を行っており、社会の問題や課題に柔軟に対応できる指導的な医療専門職業人の育成を目標に、4研究科が融合しどのような個性のある統合大学院が形成できるかなどについて検討している。平成16年度からの徳島大学中期目標、中期計画にも取り上げられており、青野学長の采配を受けながら6月の設置審への作業を進めている。今後とも関係各位の方々にはご協力ならびにご支援の程お願い致します。

## 学科ニュース

\*\*\* 医学科から \*\*\*

# 学 問 の 土 地 柄

医学科長 中 堀 豊

不況、デフレ、戦争にもかかわらず、ここ徳島では平穏な時間が流れ、卒業のシーズンを経て、新しい年度が始まった。知事の不信任、企業倒産など数々あるのではないかと叱られそうであるが、現実には私たちは自殺率が全国で最低のありがたい県で暮らしている。しかし、その向こうには大学法人化という荒波が口をあけている。また、回避されるに越したことはないが、個人向け国債の売れ残り状況を見ていると、国家財政破綻も視野に入れる必要がある。

文部科学省の長きにわたる最も基本的な方針は、日本のどこにいても同じような教育が受けられることであつた。まことに公正で立派な方針ではあるが、実現不可能なことは万人に明らかである。しかし、建前を押し通すのが役人の役目であるから、多大の努力と犠牲を払ってこの方針が徹底されてきた。公平性実現のための最も有効な方法は、レベルを下のものに合わせて、伸びるところを抑えるという方法である。教育だけでなく、経済やその他の分野でも、日本社会では常にこのような方法が採られてきた。その結果の一つが一億総中流意識であるが、建前の平等の中での実態としての大学序列化もその結果といえる。このような作り物の秩序の中では、何の努力も報われない代わりに、努力しなくても落ちこぼれないという都合のよい面も

あつた。

突然のグローバル化は、一気に社会を変えた。企業も国民も大学も、国際的競争の中でなんとか生き残ろう、浮き上がろうともがいている。ところが、今の中央官庁がしていることは監督がホームランのサインを出して、どうしてサインどおりに打たないと言っているようなものである。そんな監督と一緒に心中する気にはなれない。日本の銀行が選ぶ道は、潰れるか、外資に身売りかどちらかである。

徳島大学が独立した大学として残れるかどうかは知らない。ただ、一つ言えることがある。この地は「地政学的に」とても有利な地域ということである。学問には土地柄がある。世界の一流大学は立地が似通っている。私流に言うところ「割と便利な小さな田舎町」のことが多い。この理由は簡単明瞭であつて、本物の学者（Doctor of Philosophy）は、そういうところが好きなのだ。自然、気候風土、生活環境、文化、社会資源、知識階級の割合などを考えてみよう。日本のどこが徳島より優れていますか。現に私は徳島が気に入ってここにいる。目先や小手先のことを考えずに、本物の学者を集めて、本物の学問の花がいつも開いているような小さな田舎町を目指すのも「個性輝く」大学作りの一つの形なのである。

\*\*\* 栄養学科から \*\*\*

# 栄養学科実験研究棟の改修

栄養学科長 寺 尾 純 二

平成 15 年 2 月 14 日にリニューアルされた栄養学科実験研究棟が大学側に引き渡された。

当初より 2 ヶ月ほど工事が遅れたものの、待ち望まれた改修棟での実験研究が動き出し、また学部生の実習も開始され、栄養学科は活気づいている。今回の改

修は平成 13 年度に文科省に提出された「国立大学等施設緊急整備 5 カ年計画」に依拠したものであり、医学部全体の改修計画のスタートに位置づけられる。改修完成に至るまで学部学科教職員による話し合いを何度も重ねた結果、従来にないオープンスペースと共用

実験室を取り入れた新しい実験研究棟が蔵本キャンパスに誕生した。一階は HACCP 対応の衛生管理システムを導入した給食実習室を含む学部生の実習用スペース、二階は学生支援スペースと学内共同研究のためのラボ・スペースである。(ただし、学生支援スペースは蔵本キャンパス共通講義棟ができるまで、学部生の講義室として暫定的に利用される)。三階からは各講座の研究室と実験室に割り当てられた。各階東西の大実験室は全て目的別の共用実験室となり、他の小実験室も全て共用となった。教官室は三階と五階に集中しており、また、卒論生院生や助手などの居室はオープン化することにより研究交流の深化を目指した。厳しい経済状態の中ではあったが、医学部教職員や学生院生の協力により、世界の先端栄養学拠点に伍して研究教育を実践できる場が創られたと考えている。共通講義棟の早期着工などが課題として残されているが、これから設備の充実を図るとともに学科構成員の教育研

究実績を向上させることで大学からの期待に応えなければならない。

改修中の仮住まいなど今回の改修工事期間中ご協力いただいた全ての医学部関係者にこの場を借りて御礼申し上げます。



\*\*\* 保健学科から \*\*\*

## 保健学科近況報告

保健学科長 森本 忠興

平成 13 年 10 月、徳島大学医療技術短期大学部が医学部保健学科に改組・転換され、2 年目を迎えました。昨年 4 月、保健学科 3 専攻に第 1 期生 124 名を受け入れ、医学部の新しい学科としてスタートしております。今年も第 2 期生が入学し、入学式、オリエンテーション、新入生合宿研修等の一連のスケジュールも終わり、4 月 14 日より全学共通教育の授業が開始されました。同時に、昨年 9 名、今年 5 名の新しい教官(教授 9 名、助教授・講師各 1 名、助手 3 名)の就任がありました。学年進行中ですので、16、17 年と新教官の就任が予定されており、着々と体制が整っていく予定です。また、施設整備については、保健学科校舎新営・改修で概算要求をしており、国家予算が厳しい時節ではあるが、順次行われるものと期待しています。

さて、大学を取り巻く社会環境の変化は厳しいものがあります。21 世紀の少子化、超高齢化社会が急速に進むなかで、疾病構造の変化と相まって、医療・福祉分野では大きな変化が起っております。この背景下、

医療人としての質の高いコメディカルの人材が求められていることは周知の事実です。看護系医療技術大学は、平成 3 年にはわずか 11 校であったものが、平成 14 年にはすでに 107 校(国立 39、公立 31、私立 37)になっています。これからの少子化が一層進む中で、厳しい大学間の競争が予想されます。また、平成 16 年 4 月からの国立大学法人化は、明治維新後、大平洋戦争後の大学改革に匹敵する大改革とも云われています。今、徳島大学でも生き残りを目指した戦略が打ち出されています。我々、保健学科では、この設置を契機に教育・研究面でより一層の発展を図らなければなりません。平成 18 年度の大学院修士課程設置を予定しておりますが、蔵本地区の医学部・歯学部・薬学部の各研究科を部局化する総合大学院構想が進められており、今後、保健学科もこれに相応した大学院作りをしていかなければなりません。教官の自覚、研鑽はもとより、他学科の先生方のご協力・ご支援の程よろしくお願い致します。

## ● ● ● 特 集 記 事 ● ● ●

産学連携フォーラム - 医学 2002 -  
知識と企業活力との出会い

医学部附属病院救急部 黒田 泰弘

文部科学省（医学教育課）主催の産学連携フォーラムは、2002年の3月22日（学術情報センター）および12月18日（日本科学未来館）に開催され、大学医学部・歯学部・薬学部および医療センター、医療機器メーカー、医薬品メーカーの発表に加えて、個別の情報交換のスペースが設けられました。本フォーラムの開催趣旨は、医歯薬分野において大学および産業界における研究開発活動の情報などを共有することにより産学連携を推進し、医歯薬・医療技術産業の発展を図ることです。その内容をご紹介します。

まず、文部科学省技術移転推進室およびライフサイエンス課より、知的財産基本法の2002年11月制定に併せて、知的財産戦略の推進に向けた取り組みとして、大学毎の知的財産本部の整備、競争的環境の整備（競争的資金の増加、COEの形成）産学連携のルールの整備、制度改善（役員兼業の要件緩和など）大学における目利き人材の雇用、トランスレーショナルリサーチの推進、大学発ベンチャー創出支援、などの説明がありました。これらは地域の産官学連携強化プログラムである知的クラスター創成事業と密接な関係があります。

次いで、科学技術振興事業団JST（文部科学省の特殊法人、<http://www.jst.go.jp/>）の技術移転事業の説明があり、とくに研究者などの出願経費をJSTが立て替える特許化支援（有料特許）制度、公募型成果育成プログラムなどが概説されました。JSTは事業として、技術シーズの創出（基礎的研究）新事業の企業化（技術移転）に加えて情報基盤の整備を行っておりそのデータベースは有用と思われます。さらに新規事業に関して日本政策投資銀行からの提案もありました。

この後、各大学、企業からのプレゼンテーションおよびブース出展での情報交換会に移りました。プレゼンテーション参加数は3月では、33大学、1医療センター、6企業、12月では27大学、1医療センター、2企業から行われました。情報交換のブースは3月では

33大学、1医療センター、15企業、12月では、26大学、1医療センター、7企業で設けられました。内容はバイオテクノロジー・ナノテクノロジーを応用したとくに再生医療に関する発表が企業化できる点から大部分ですが、情報技術ITを利用した発表も多くみられ、また医療安全管理技術の視点も重要と感じられました。すでにベンチャー化して、ブースにだけ出展し、意見交換というより売り込みが活発な事業もありました。各発表は企業秘密、特許の世界ですので、各自すべてを発表する訳にもいかないこと、このフォーラムには、参加大学、メーカー、文部科学省以外の第三者の参加が比較的少ないと思われることなどが、2回目の参加数が減少した理由と考えられましたが、各発表の内容の進歩は著しく、文部科学省による制度の整備や各大学の体制作りも急ピッチで進んでいると感じました。

今回、医学部附属病院医療情報部森口教授（IT・マルチメディア技術を用いてのチュートリアル教育支援、図1）、薬学部製薬化学科根本助教授（5つの創薬特化型鍵化合物のコンセプトと実用的医薬品化までの開発知的支援、図2）の御発表に加えて、黒田が発表させていただきました（医療安全管理体制を支援す

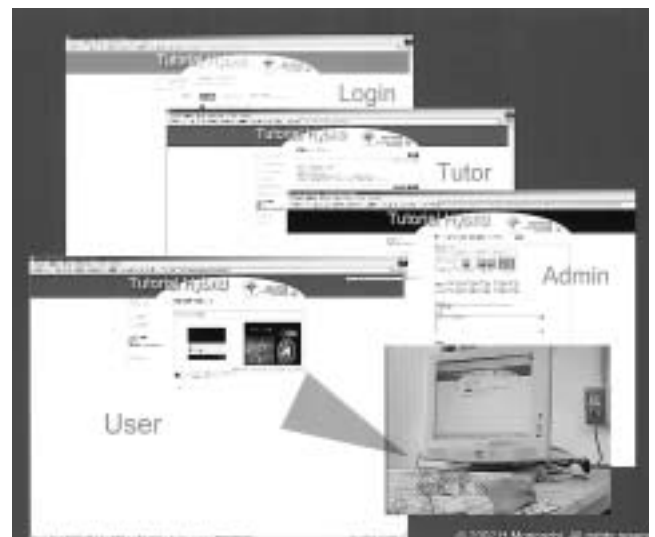


図1

るシステムの開発：医療機器の保守管理および中央監視システム、図3）。徳島大学では工学部との連携も大きなメリットですし、経済産業省の関連機関である新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）による事業に採択されることも目標とすべきことの1つと

考えられます。徳島大学としても現在行っておられるこの領域の取り組みをさらにアピールしていく必要があると考えます。なお、第2回の内容は、日経バイオビジネス（<http://biobiz.nikkeibp.co.jp>）2003年2月号（1月15日発売）で紹介されています。

徳島大学薬学部・根本尚夫  
医薬品開発支援のための分子設計—リード化合物から実用的医薬品化までをつなぐ—（有機化学的側面からの知的支援）

これまでの有機合成化学者はリード化合物を企業に選した時点で貢献が終わるケースが多い。つまり実用化までの段階における有機合成からの「知的支援」は少ない。こうした「知的支援」に關わる切り口の違う「有機合成」の5つの研究トピクスを発表した。

5つの鍵化合物（略称名：説明（共同研究相手））

- 1) PLG：水溶性向上化試薬（協和発酵（株）、四国TLO）
- 2) CPF：新世代光学分割剤（日本ゼオン（株）、四国TLO、NEDO）
- 3) MAC：3成分連続試薬（エーザイ、四国TLO）
- 4) DTHE：新規MRI造影剤（日本ゼーリング（株）、四国TLO）
- 5) RCV：ベンゼン環のピンポイント認識（（株）クラレ）

1) PLG：水に溶けないだけで埋もれた医薬品等の救世主を目指す。標的の難水溶性医薬品候補分子と混ぜるだけで水溶性化試薬に変化する取り扱い容易な工夫を盛り込んでいる。有機合成の専門家だけでなくも簡単に操作できる。大きなタンパク質での実施あり済み。PCT特許出願済み。

2) CPF：簡便にd1体を光学分割できる試薬。適応可能な分子の多数の例あり。分離は安価に市販されるシリカゲルのカラムで可能。分離度が著しく高い（最高で、 $\Delta Rf=0.15$ ）。分割剤本体（=CPF）と分離対象の化合物の化学的脱着操作が簡便で高効率。医薬品は光学活性体が常識化しており、その原料、中間体、医薬品自体の簡便で安価な分割法になる意義は大きい。CPFの合成も4段階で容易。共同研究の企業で数百キログラムのスケールでパイロット製造まで達している。経済産業省関連機関（NEDO）による事業に採択された。PCT特許出願+周辺特許出願済み。

3) MAC：3成分を1段階で反応させることができ、ペプチドミミック構造（ $\alpha$ -ヒドロキシアミド等）を与える。高収率で短時間な反応（ $\sim 90\%$ 、1分 $\sim$ 2時間）。ハイスループットアッセイに対応させるハイスループット化学合成への適応性が高い。MACの短段階合成法は平成14年1月9日付けの朝刊等（7社）に記事となった。PCT特許出願済み。

4) DTHE：高技術な最新診断法。MRIでの造影のコントラストを飛躍的に高めるマグネシウム（シェーリングの商品名）に、機能性有機部位をハイブリッド化できる分子。ヨーロッパ特許取得。さらなる新性能を目指して日本ゼーリング（株）との共同研究開始（平成15年度）。

5) RCV：ベンゼン環を囲むようなナノサイズの立方体型空間を有する分子。分子部位認識の特異性を突き詰めて磨き上げたこだわりの分子設計。最新プロジェクトであり、現在基盤を固める段階が進行中。

図2



図3

## 受賞者紹介

このコーナーでは、学術関係の各賞を受賞された医学部関係者を紹介します。

### 医学部研究奨励賞

安倍正博	第一内科 講師	A mechanism of myeloma-induced osteolysis and its role in myeloma expansion
後東久嗣	第三内科 医員	新規血管標的薬 ZD6126 の肺腺がん肺転移に対する効果

### 岡奨学賞

須崎友紀	情報伝達薬理学分野3年	酸化ストレスによる Big MAP kinase1 による活性化とその役割
河原司	栄養生理学講座2年	Toll 様受容体と nox1 遺伝子による胃粘膜上皮の自然免疫応答の分子機構

### 徳島新聞医学研究助成金

土屋浩一郎	情報伝達薬理学 助手	生体内亜硝酸由来一酸化窒素 (NO) の生理的役割の解明
宇野昌明	脳神経外科 講師	急性期脳梗塞の診断と治療に関する研究

康 楽 賞

広 川 満 良	医学部 助 教 授	甲状腺腫瘍の分類学および予後因子に関する分子病理学的検討
東 博 之	医学部 助 教 授	アスピリンの新たな動脈硬化抑制作用の探索とその臨床的応用に 関する研究
香 美 祥 二	医学部付属病院 講師	進行性糸球体障害における細胞外基質レセプター, 1 1-イン テグリンの役割解明
細 井 英 司	医学部 助 教 授	血液細胞分化過程における血液型糖鎖抗原の発現機構の解明
桐 間 一 嘉	医学研究科博士課程生理 系専攻情報伝達薬理学	電子スピン共鳴法を用いた血中一酸化窒素測定法の開発
梨 木 邦 剛	栄養学研究科博士後期課 程栄養学専攻病態栄養学	ナトリウム依存性リン酸トランスポーターの細胞膜上の局在と PTHによるエンドサイトーシス
原 恭 子	医学部 医 学 科	成熟 T 細胞の胸腺移出における CCR7 リガンドの関与
庄 司 友 里	医学部 栄 養 学 科	糖質および脂質代謝を改善する経腸栄養剤に関する研究

第 10 回徳島医学会賞

桑 野 由 紀	栄養生理学 ( 院 生 )	大腸上皮細胞の発現する NADPH oxidase 1 (Nox 1) の分子特性
青 木 秀 俊	県立中央病院	より大きな病変の一括切除を目指した新しい EMR 主義：切開・ 剥離法 早期胃癌の EMR 適応拡大に向けて

学生・保護者の皆さんへ

● 教務委員会から ●

新 入 生 の 皆 さ ん へ

教務委員長 田 代 征 記

入試の難関を突破し見事医学部に合格され、新入生になられたこと、本当におめでとうございます。ほっとされていることでしょう。特に、医学科では教育改革が行われ、2年前から実施されています。それにより、1年の後期から医学部の専門科目が入ってきて、2年では8割が専門科目授業となっていますので、今までは共通教育授業（一般教養）の単位を2年間で取れていたものが、1年生の単位を一つでも落とせば、物理的に授業が受けられないので留年せざるを得なくなります。3年からは2年間チュートリアル教育（自学自習）がはじまり、5年でクリニカル・クラークシップ（参加型臨床実習）6年生で実践医学実習となり、

更に過密スケジュールとなります。大変ですが、入試とちがい資格試験ですので、真面目に、普通にやっておけば出来ることです。新入生に送る key words は SpECCC（スペックシシ）です。すなわち、Sport, English, Computer, Communication, Corporation で、スポーツ（医学部は長く、体力が必要で、是非何かのスポーツをやって下さい）、英語（論文、国際学会すべて英語です、speaking, writing を身に付けること）、コンピューター（これからの必需品です）、交際（いい友達を沢山作って下さい）、協調性（医療はチームワークです。協調性を養って下さい）です。人間の巾を広げて、学生生活を enjoy して下さい。

## ● 学生委員会から ●

## 教育環境の整備にもっと意識を

学生委員長 佐野 壽 昭

学生委員会は学生の教育支援を任務とする委員会で、対象は医学部で教育を受ける学生の生活全般にわたっています。勉強のやり方、履修・登校上の悩み、対人関係、財政的な問題、交通事故処理など広範に受け付けています。学生委員会とともに、学生相談室も様々な悩みについて対応してくれますので利用して下さい。しかし何よりも、級友、先輩、教官と胸襟を開ける人間関係を早めに築き、有意義で濃密な学生生活を送れることを期待しています。

さて、現在授業を受けている教室、実習室はどのような状態ですか？建物によって違いはあると思いますが、黒板・机周辺はきれいですか？教室の外のスペースはどうですか？紙コップ、空き缶、吸い殻が散らかっていませんか？勉強に忙しくて、きれい、汚いは関係ない、そんなことには関心はないという学生もいると思いますし、環境を整備するのは大学の仕事であって学生は授業料を払っているお客様であると考えている学生もいると思います。しかし、自分の部屋をどれだけ散乱させていても結構ですが、多数の学生が共同生活するスペースを自分の手で汚くしておいて、だれかがきれいにしてくれると考えるのはいかがなものでしょうか。自分らが汚した部分は自分で片づけるというのは小学校から学んできたはずの共同生活上のルールです。大学生になるとルールは無視していい訳ですか？

たしかに、教室の窓ガラス、網戸は汚れっぱなしのまま何年も放置されています。掲示板には数年前の文書が汚れたまま貼られています。玄関周囲には吸い殻、

紙屑が投げ捨てられ、きれいとは言えない台車が廊下を占拠しています。こうした環境に教官、職員が慣れてしまい、汚れとも感じなくなっています。学生諸君だけに教室をきれいに保てと言ってもこれでは空虚に響くだけでしょう。学生委員会として、これまで余り重視されてこなかった大学としてやるべき教育環境整備は、今後きちんと推進するつもりです。

散乱した環境に慣れてしまうことによって医療や医学研究に直接的な悪影響が出ることはたぶんだいでしょうけれども、自己責任の回避、知らんぷりを決め込む態度が人を蝕んでいきます。これを黙視すべきではないと考えます。

再開発によって建物が新しくなれば、しばらくは見た目のきれいな状態でしょうが、きれいな環境を維持する気持ちを持たないと元のようになるのは目に見えています。教育環境は建物を作り変えたり、新しい装置を導入することだけで向上するものではありません。古い建物でも手入れ次第で居心地のよい場所であり続けます。

要は、だれかに依存するのではなく、自分の汚したものは自分で片づける、共同利用スペースは積極的に整備すると心掛けることです。意識改革などと大層なことをいうつもりはなく、当たり前のことをやろうということです。

日常的教育環境は意識すればましになるのです。最高学府とされる教育の場にふさわしくなるようにちょっとだけ努力してみませんか。

## ● 医学研究科から ●

## 学問のための職場

医学研究科・教育研究委員長 中 堀 豊

医学研究科博士課程は平成14年度に改組され、医学専攻とプロテオミクス医科学専攻の2専攻でスタートし1年が経ちました。平成15年度は医科学専攻修士

課程が設置され、学内学外からの学生を迎え、5月から授業が始まることになりました。

大学院カリキュラムとその履修方法については、教



官の中でさえ考え方が統一されておらず、混乱が生じ、学生に迷惑をかけています。迷惑を受けていることさえ認識していない学生もいると思います。正式のカリキュラムには配当年次というものがあり、ある単位については1年生の時に取らなくてはならないとか、2年生のみが取れるというようなものがあるのをご存知ですか。これを、厳格に適用すると、1年が終わり2年になった時点で、終了できないことが確定しているケースがあると想定されます。皆様の意見を参考に、徐々に整理・改善していきます。

ただ、大学院として実際に機能するための、要点だけ繰り返しておきたいと思います。

大学院の改組、新設にあたり、文部科学省医学教育課から指導を受けたことは2つのことに尽きます。一つは「学生をしばらず、学生の選択の幅を広げること」、もう一つは「教室に囲い込まないこと」です。そして、あまりにも当然で言うのも恥ずかしいのですが、大学院は形式だけではなく、実際に教育をするということが求められています。これについては、教官の側にもいろいろ意見があると思いますが、研究大学として本当の大学院教育を考えているというのであれば、やはり「実際に行う」ことは絶対に必要なことです。もっとも、その内容や単位の与え方については、さまざま

なバリエーションが考えられると思います。教官・学生互いの負担ばかり増えるような役に立たない講義や演習は避け、実際に役立ち、高めあえるような方法を探りたいと思います。

さて、大学院は研究をするところです。今、臨床をする病院との対比で考えてみます。病院の運営には医師、看護師、コメディカル、事務職員などが必須です。したがって、ハード面として、看護師の寮が整備され、医師や事務職員の当直室があります。特に主要な働き手である若い医師や看護師の職場へのアクセスが最も重要視されていると思います。ひるがえって、我々は研究に関して環境整備のための投資を何かしているでしょうか。研究は、指導者とポスドク、学生、それを補助する人たちによって行われます。この人たちのためのアメニティーは一体どこにあるのでしょうか。学問を推進する最大の力は学生と若い研究者です。どうして、職場のすぐ近くに彼らの住むところがないのでしょうか。どうして、研究場所の中に、彼らが休み、お茶を前にして議論する場所がないのでしょうか。先日行ったスタンフォード大学には大学の一等地に、ポスドクの家族寮がありました。研究をバックアップする環境整備に関する彼我の認識の差はあまりにも大きすぎます。

## ● 栄養学研究科から ●

# 大学院栄養学研究科の最近の話題

栄養学研究科・教育研究委員長 山本 茂

徳島大学大学院栄養学研究科は、博士前期課程（通称修士課程）と博士後期課程（通称博士課程）があります。定員は、修士課程は14名、博士課程は7名です。最近は大学院、特に修士課程の希望者が多くて、優秀な人材が多数応募されます。修士課程では、定員よりかなりおおい20名余りが毎年入学しています。

最近、大学院の入試体制にも多様性が求められています。当研究科におきましても、昨年からは年間3回（9月、2月、6月）の入学試験を設けました。また博士課程では、昨年からは社会人入学制度を始めました。社会人の方も夜間、休日、夏休みなどを利用して、大学院で勉強することができます。また、来年度からは修士・博士課程とも、修学年限を最大2倍まで延ばす

ことも可能となりました。時間が十分にとれない社会人は、より長い時間をかけて学位をとることを推奨するものです。授業料も原則的には、総額でほぼ同じになる予定です。この制度は一般学生も利用可能です。

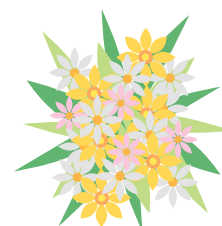
また、昨年には大学院国際環境・予防医学英語特別コースが誕生しました。これは、医歯薬3学部統合のコースで、学生は希望の分野で学ぶことができます。入学前に希望学部を決定します。初年度の栄養学研究科の入学者数は最も多く、6名（修士課程2名、博士課程4名）でした。一般の大学院研究科にも留学生はいますので、国際色が非常に豊かになっています。日本人学生にとっても留学生との交流は、将来、国際的に活躍するための幅広い人間形成に役立つと思います。

## 医学部ニュース

### ××× 平成 14 年度徳島大学学生表彰さまる ×××

さる3月14日、徳島大学学生表彰授与式が行われました。この表彰は、課外活動等において顕著な成績を修めた学生を表彰する制度です。医学部からも5名(下表・写真)の学生が受賞いたしました。

学生氏名	学科・学年	表彰理由
郷 司 彩	医学科 3 年	第 50 回全日本ローラースケート選手権(女子規定第 1 位)
藤 原 敏 孝	医学科 3 年	第 36 回全日本医科学生体育大会(弓道競技個人戦第 3 位)
草 山 隆 志	医学科 2 年	第 54 回西日本医科学生体育大会(弓道競技個人戦優勝)
木 村 哲 夫 中 島 智 博	医学科 6 年 医学科 5 年	第 54 回西日本医科学生体育大会(バトミントン個人戦ダブルス優勝)



### ××× 平成 14 年度医学部学生表彰 ×××

医学部では、卒業生のなかから学業成績優秀者に対して中田賞(医学科生) 児玉賞(栄養学科生)を授与しております。14年度の中田賞は原 恭子さん、児玉賞は庄司 有里さんに授与されました。

### ××× 医学部ホームページ(HP)まもなく公開 ×××

リニューアルが遅れておりました医学部 HP の入力作業がさる3月12日より開始されました。各分野の入力状況を確認した上で、まもなく HP が公開される予定です。

### ××× 青藍会 M.D.Ph.D. 奨励金 ×××

医学科学生が4年生を終了した時点で一度医学部を中退して大学院に進学し、基礎医学研究を始める M.D.Ph.D. コースを新設した。徳島大学が研究大学として発展していくためには、若い優秀な学生が基礎医学に興味を持ち活躍することが不可欠である。早速、3名の学生が M.D.Ph.D. コースに入学した。この新しい大学院の取り組みに、医学科同窓会「青藍会」は M.D.Ph.D. コースに進学した学生に対する支援を決め、総会での決定後に「青藍会 M.D.Ph.D. 奨励金」を3名に贈る。

(文責:青藍会広報委員 玉置俊晃(情報伝達薬理学・教授))

医学部だよりへのご意見・ご要望は、こちらのメールアドレスへお願いします。(iggakusus@jim.tokushima-u.ac.jp)